

三十八度の 川今渡る

昭和六十年一月 四十年前をしのんで

・北朝鮮の 寒さと飢えに 命尽く

引揚船を 今か今かと

・避難民 六十年も 眠りたる

遺骨はいつの日 祖国へ帰る

・隣人の 呻き声途絶え 昇天し

復員風の 故郷いずこ

・船は来ず 夢に故郷 描きつつ

吹雪く兵舎よ ここは富坪

・富坪は 死への旅とは 知らぬまま

移動させられ 餓死凍死する

京城からの引揚者

神奈川県 田中留里

一 京城に住むまでのいきさつ

私は昭和五（一九三〇）年東京に生まれ、小学校は、当時はまだ原っぱの多かった世田谷下北沢の第三荏原尋常小学校にあがった。父は東大土木工学科を出た技術者で、東京市役所に勤めていた。家族は母と五歳年下の弟の四人で、秩父から来たお手伝いさんがいた。父は東京育ちだが、母は長崎市外の農村で育った人である。両親が結ばれた事情は、祖父母の生い立ちを述べたほうが分かりやすい。

父方の祖父は、明治元（一八六八）年に南部盛岡藩の下級武士の家に生まれた人で、維新では賊軍側でもあり、貧しく育ったらしい。成人後は上京して、巡查をしながら苦学して海軍経理学校に進んだ。そして主計科の海軍士官となり、上官の

娘と結婚して赤坂氷川町の小さな家に住んだ。上官といっても、これもまた維新負け組の徳川の御

家人の出身だった。明治初期には結婚にも封建時代の残滓ざんしを引きずっていたようで、負け組の下級武士の家同士の結びつきである。

祖父は日露戦争に出征し、日露大海戦には巡洋艦「浅間」の主計長として参戦している。出征直前の明治三十七年に、祖父が父と撮った写真が我が家に残されている。海軍士官の礼装の祖父の隣に、幼い二歳の父がひらひらのついたエプロン姿で立っている写真である。

我が連合艦隊は、ロシアのバルチック艦隊に対して、その眼前である有名な十字戦法を展開して大勝利を得たが、「浅間」だけは被弾して艦列を離れたそう、ロシア側では「浅間」を撃沈したとして歓声を上げた記録に残っている。しかし応急修理した「浅間」は、翌日には戦線に復帰してその英姿を現してロシア側を落胆させたとのことで、祖父が乗艦した「浅間」は、大勝利の裏でこんな危

険に曝されていた。

幸いにも祖父は無事に生還し、戦後は軍港回りをしながら一男三女を育て上げ、海軍を退官してからは東京に居を定めた。

父はその一人息子で東京大学工学部を出た後、祖母が脳溢血の後遺症で体が不自由になっていたので、地元での就職を親に勧められ、東京市役所に勤務していた。

資産のない家の長男で、病気の母親を抱えた父の縁談はなかなかまとまらなかった。そこへ長崎の田舎から上京し、叔父の病院に身を寄せていた母を紹介され、歌舞伎座で一度見合っただけで結婚した。盛岡出身と長崎育ち、士族と商家という組み合わせだったが、父と母は生涯仲の良い夫婦だった。祖父母が昭和の始めに相次いで亡くなった後は、両親は空気のきれいな郊外に住居を移した。

東京市役所で、父は河川局橋梁課に勤めていた。役所から帰っても、遅くまで書齋にこもっている

人だった。休みには古びたリュックサックを背負って独りで山歩きに出掛けていた。私は近くの小学校に通い、放課後は友達と遊ぶのに忙しく、父とは没交渉で暮らしていた。

私が四年生になったところ、引越しかか転校とかの言葉が飛び交い、家中が騒がしくなった。父が京城（ソウル）帝国大学に招聘される話が本決まりになったのである。

東京市は関東大震災後の復興計画の一環として交通網の整備に重点を置き、隅田川の河口近くに近代的な可動橋を建設した。これが勝鬨橋で、技術陣の一人として参加した父は「鋼橋の強度に関する論文」が認められ、新設の京城大学工学部の教授に招かれた。

研究者になることは父の夢だったし大学教授は憧れの職業だったから、家中喜びに沸き立っていた。盛岡や長崎から親戚が次々と上京して、お祝いや別れの言葉を述べていった。

まだ春浅い風の冷たい日に、父に連れられて河岸に移った。もう一度サイレンが鳴ると、勝鬨橋はゆっくりと開き始めた。大きな鉄の橋が天を指したところで動きを止めた。固唾を飲んで見守っていた両岸の見物人たちから拍手が起こった。私も掌が痛くなるほど手をたたいた。下の川では、待ち構えていた大型船が東京湾目指して次々に航行して行った。

私は小学校の教壇の脇に貼られていた世界地図で、当時は日本の植民地だった朝鮮が赤い龍の頭に見えることも嬉しく、得意げに友達にこれから転校する土地のことを語った。

浮き立つ家族に水を浴びせたのは、お手伝いさんの兄だった。秩父の山で猟師をしている兄さんは山鳥を土産に訪ねて来て、「妹は朝鮮にはやれねえ、そんな所に行ったら嫁にもやれねえし一生会えね」と頑固に言い募り、母が「土地に馴れる半年だけでも」と懇願するのにも首を縦に振らなかつた。意外にも、お手伝いさんは頬を赤くして下を向いたまま黙っていた。京城が、遙かな異郷

は勝鬨橋を見に行った。電車を何度も乗り換えて隅田川の岸に立つと、向う側が霞んで見える広い流れに巨大な鉄橋が架かっていた。車や人の流れの中に私たちも混じった。橋の中ほどで父は立ち止まり、ズボンが汚れるのもかまわず膝をついた。父の手の下には橋を横切って線が延びていた。「橋はここから開くんだ」と父は言い、こつこつたいて響きに耳を澄ませた。

その時、後ろで「危ない！そこに触っては駄目だよ」という声があった。振り向くとねんねこで赤ちゃんを負ぶったおばあさんがいた。「そこから橋が開くんだ」とおばあさんは重ねて言った。父は素直に立ち上がり、膝の汚れを払いながらおばあさんに訊ねた。「橋が開くのを見ましたか」「私は近所だから、もう何度も見たよ。それは豪儀なものだ」「そうですか。豪儀ですか」父はおばあさんの言葉を嬉しそうに繰り返していた。

やがてサイレンが鳴り出すと、橋の上の車も人間も一斉に動き出し、橋から消えた。私たちも河

であることに私が気付いた最初である。

二 初めての京城

建国紀元二千六百年を祝う花電車が、東京の市内を走り回って祝賀に沸いた翌年の昭和十六年春、家族四人は大勢の人に見送られて東京をあとにした。大垣までは叔母が一緒だった。特急「燕号」には食堂車がついていて、純白のテーブルクロスが敷かれていた。私は列車の揺れでおつゆをこぼしそうになりながら、気取って食事をしたのを覚えてい

る。叔母と別れた後、家族は大阪で途中下車して親戚の家に泊まった。長旅に子供たちが飽きるのを案じた父の心配りだったのだろうか。または、当分会えなくなる親戚への挨拶でもあったのだろうか。この親戚の家は、昭和二十年の大阪大空襲で焼夷弾を受け、叔父夫婦は爆死してしまったので、そのときがまさに最後の別れになったのである。

大阪から再び乗車し終着駅の下関に着いたときは、日はとつぷり暮れていた。私たちはそのまま

関釜連絡船に乗り込んだ。それまでの汽車は二等だったが、連絡船は父が一等室を予約していた。清潔なベッドがあり、家族だけになれた。すぐボーイさんが小梅の小皿を添えた熱いお茶を持って来てくれた。

「船は一等でない揺れて大変なんだ」と父は言い、「明日の朝は釜山に着いてるよ」と付け加えた。父の言葉どおり翌朝目覚めると、明るい朝日の中で船は釜山港に入ろうとしていた。

釜山からの特急列車「亜細亜号」は朝鮮半島を北上して走り続けた。車窓から初めて見る半島の景色は、茶褐色だけの枯野だった。たまに遠くに霞む人影は白い服を着ていた。前日通り過ぎてきた日本内地の、早くも麦の芽生えが見られ畑地や家々が遠くに見える農村とはまるで違っていた。

昼過ぎに、汽車はようやく京城駅に着いた。東京駅を出て以来、三日がかりの旅だった。ホテルに荷物を置くなり、私たちは街に出た。その日の京城は柔らかな春の雨に濡れていた。傘を頼むと、

用意してくれたのは色鮮やかな唐傘だった。父は

藤色を取り、母はオレンジ、弟は緑、私は桃色の唐傘を音高くあけて歩き出した。行く手には、華麗な南大門が雨に煙りながら聳^{そび}えていた。すれ違ふ人は美しいチマチョゴリの女性だったり、白い朝鮮服の男性だったりした。朝鮮一の都市の一番の繁華街を、私の家族は派手な傘を連ねて歩いていた。それが、この土地にびつたりのように思われた。私は桃色の傘からピンクの雨を降らせながら、遠い国に來たと強く感じていた。

当時は京城と言っていた現在の大韓民国の首都ソウルは、周囲を丘陵に囲まれた盆地で、西部の漢江に向かって平野が開けていた。日本統治時代には朝鮮総督府が置かれ、日本の朝鮮統治の拠点だった。父が赴任した京城帝国大学も、その政策の一環として法文学部、医学部に加え、昭和十六年には理工学部を新設し、朝鮮半島の技術教育を担おうとしていた。

落ち着いた先の我が家は、京城の東を囲む駱駝

山の麓にある官舎だった。ごく普通の平屋だったが、下北沢の家とは違い、鍵のかかる門や塀のあることが私には珍しかった。オンドルは親たちにも初めての床暖房だった。石組みの上に油紙を敷き詰め、床下は煙道になっていて、焚き口で石炭を燃やすと熱い煙が煙道を通り抜けて行く。冬暖かいだけでなく、夏は石の床がひんやりと冷たくて使い心地の良いものだった。

引越しが一段落すると、私は家の前の坂を登って駱駝山に登ってみた。道はすぐ花崗岩の露出した岩肌になった。「ふたごぶ駱駝」そっくりなのは樹が生えていないからで、少し樹が育つと冬の燃料として伐ってしまうので、常に山肌は裸であるといわれた。頂上目指して登って行くと、足元で花崗岩がとめどもなく崩れた。頂上近くには、蓆^{むしろ}を吊るしただけの家が何軒か固まっていた。土の床には汚れた鉢がじかに置かれているのが見えたが、人影はなかった。その先は尾根道になっていて、道沿いに壊れかけた土塀が延々と続いてい

た。土塀のそこに銃眼が開けられていて、覗くと畑が見えた。昔、京城の東を守る防壁だったらしい。女の子が独りで出歩く場所ではないと思うが、それからも退屈すると私はよく駱駝山の尾根道を歩いていた。別の言い方をすれば、それくらい京城の治安は保たれていたのである。

三 京城の暮らし

私と弟は、徒歩で十五分ほどの京城公立昌慶国民学校に通い始めた。弟は一年生、私は五年生だった。この年から日本中の小学校が国民学校と名を変えたのだった。私の記憶の中では、小学校は世田谷の第三荏原であり、国民学校は京城の昌慶と別々のもののように分かれている。昌慶校は、少し前に東大門小学校から別れた新設校だった。大陸進出の拠点として、京城も日本人の人口が急増したので児童数も増えていた。李王朝時代の離宮だった昌慶苑の近くなので、この名になったのだらう。コンクリート造りの三階建ての校舎には、水洗トイレ、ダストシュート、スチーム暖房など

の近代的設備が完備していて、植民地ならではの立派な学校だった。しかし通学してすぐ分かったが、トイレは水が流れず一階のトイレしか使えなかったし、暖房はなぜか石炭ストーブに頼っていた。現代風に言えば、ハードはできたがソフトは駄目ということである。

五年生は男女各一クラスだったが、一年生の弟は児童数増のせいで男子組女子組、男女組の三クラスに分かれていた。

転校したその日から、私は「東京から来た」ということで友達に取り囲まれた。お手玉の代わりに小石を使う「コンギ」の仲間にも入れてもらえた。東京のゴム跳びは、ここでは「一段飛び」だったが、遊び方は同じだった。

校庭の隅にポプラの樹があったが、ポプラの枝には腹の白い鳥が止まっていた。「かち鴉」という種であることはあとで知るが、ここには白い鳥がいると不思議だった。白い鳥は鳴くこともなく、子供たちの遊びを見下ろしていた。

弟はその子の家に遊びに行き、お母さんが二人居た、と目を丸くした。

そんなことで、小学校生活は私にとっては東京時代と大差なかった。その年の冬、米英に対し宣戦布告がなされ大東亜戦争が始まったが、大人たちの緊張をよそに私の暮らしには大きな変化はなく、二年後の昭和十八年春には京城公立第一高女に進学した。

そのころから戦局は厳しくなり、市内の店から生活物資が姿を消した。品物が並ぶと行列ができた。京城の目抜き通りを通って通学していた私は、「行列を見かけたら何でも良いから並んで買いなさい」と母から風呂敷を持たされていた。醤油だったり海苔や煮干しだったり、饅頭の日もあった。母は品物が何であれ、とても喜んでくれた。

女学校ではまず敵性語である英語教育が中止され、次第に授業時間のほとんど全てが勤労奉仕にあてられるようになった。教室は学校工場になり、前線から送られてくる戦闘服の補修や航空機の部

最初の日、学校から帰ると両親が「内地人の子は何人くらいいたか、仲良くなれそうか」など心配そうに訊ねた。休み時間の様子を話し、内地人ばかりだったと答えるとはっとした様子だった。先に帰宅した弟が「朝鮮の子がいた」と答えたので、この質問になつたらしい。ちなみに弟と私は、

両親からあらかじめ日本と言ってはいけないと、懇々と言い聞かされていた。朝鮮は日本の一部であって、「内地と外地」の違いだと教えられていた。京城には初等教育から大学まで教育機関は整っ

ていたが、内地人と朝鮮の人の通学する学校は違っていた。日本語教育を強制し、教育内容は同一であつても別々の場所に住み、別の学校に通っていた。弟のクラスに朝鮮の子がいたのは特殊なケースで、親が親日家だったり裕福だったりすると、高い授業料を払って内地人の学校に通わせることができた。弟は最初の日から朝鮮人の子と仲良しになり、「ヤンパン（両班・特権的な支配層）の子なんだって」と両親も知らない知識を披露した。

品に使う雲母鋼はがしを終日熱心にした。農園作業や工場動員にも行かされた。自慢の制服である波線のついたスカートは、もんぺに変わった。急速に戦時体制に変化していった。

我が家にも少しずつ戦争の影がさしてきた。週二回来ていた通いのお手伝いのテイさんの家族が、夜遅く風呂をもらいに来るようになった。子沢山の家だったが、夫に職がなく暮らしに詰まったようだった。深夜、台所では家族がかわるがわる出入りする気配がした。

深夜といえば、ある夜更けに突然女性二人連れの訪問客があった。年配の人とまだ若い人だったが、どちらも目を見張るような美しい朝鮮服を身につけていた。父の学生の母親と姉だった。父の教室は、土木工学科だったが、朝鮮では技術よりは法科が重んじられる傾向にあつたためか、朝鮮出身の学生は少なかつたが、そのうちの一人で、仲間たちがにぎやかに談笑しているときでも隅で暗い顔をしていたので、逆に目をひいた。

姉の方が話を切り出し「弟の行方を捜してほしい」という願いごとだった。警察に逮捕されたことまでは分かっているが、それからの先が分からないと話を続けた。そばで母親がうなずいて袖口を目に当てていた。そんな母親を見ながら、姉は「助けてほしいとお願ひしているではありません。私たちの父は独立運動の志士でした。弟も運動のために命を捧げています。家族は覚悟していますが、母があまり悲しむので生死だけでも分かれば、とお願ひに來ました」と言った。姉は昂然として背筋を伸ばして話した。朝鮮半島では、ひそかに地下の独立運動が進んでいると聞いていたが、実際に私が独立運動に関わっている人に触れた最初である。

父は安否確認だけを約束して警察を尋ねまわったが、何の情報ももらえなかったばかりか、逆に父が「赤（共産主義者）」ではないかと詰問されたそうである。「失敬な、俺は砲兵将校だ。（父は予備役の砲兵将校である）」と抗議して、ようやく放

った。

表面は無事平穏な生活のうちに「八月十五日」を迎えた。

四 異国で迎えた終戦

昭和二十年八月十五日、私は京城第一高女の三年生だった。早朝、登校の支度をして家を出た。この日も暑くなりそうな気配で、太陽は既にぎらぎらと頭上に輝いていた。京城の夏は短い、短い夏はとても暑い。平時なら暑中休暇の時期だったが、敗色の濃い非常時なので女学生も休みを返上して勤労作業に頑張っていた。

私の学年は五クラスだったが、学校工場、農園での食糧増産、そして工場動員が二カ月交代で回っていた。八月は学校工場の番だったので、私は学校へ急いでいた。私は上着だけ制服を着て、スカートはの代わりにもんぺはを穿き、いつ空襲に遭っても困らないように、救急袋と防空頭巾を左右に振り分けにした姿で、教科書は一冊も持っていないかった。その日は苦手な雲母作業の順番だったの

免してもらえた。このときは、独立運動に対する警戒の厳しさが分かっただけで、父の捜索は徒労に終わった。

同じころ、馬に乗った将校が朝早く我が家の門をたたいたことがあった。兵士として召集されていた母の甥の死を告げた。葬式に参列することを許された両親が、白い布に包まれたお骨を抱えて帰ってきた。長崎の母の姉の三男が召集されたことは聞いていたが、朝鮮軍に所属していたことは知らなかった。彼の兄はシンガポール攻略戦で戦死したが、戦死の公報が入って初めて、シンガポールで戦っていたことを家族は知った時代である。母の甥は盲腸炎の手遅れで死んだそうだ。最後を看取った軍医が、「薬は全部前線に送られているので、手当の仕様がなかった」と両親にもらした。「早く知らせてくれれば大病院に移して、盲腸炎ごときで死なせはしなかった」と両親が怒っていた。朝鮮軍においても、後方部隊の装備は手薄になっていることが、彼の死で我が家にも伝わ

で、大きなため息をついてから歩き出した。京城の街にも食糧不足は始まっていて、そのころの私はいつも空腹で疲れていた。学校までは、郊外の私の家からは朝鮮の人の居住区を小一時間歩かなければならなかった。市電やバスもあったが、徒歩通学が決まりである。「ガソリンの一滴は血の一滴」だから、資源を無駄にできなかった。まだ寝静まっている狭い道を、私は早足に歩いていた。歩きながら私が考えていたのは、弟のことだった。五年生の弟には、集団学童疎開の話が持ち上がった。米軍による京城空襲が間近だと言われ、小学生を北朝鮮の方に集団疎開させようとしていた。私の女学校でも日本内地から疎開して来る人がいる一方、日本の田舎に転校していく人もいて、騒然となっていた。人々は安全を求めて右往左往していたのだった。

我が家では、弟の学童疎開には父が反対だった。「京城が空襲されれば独立運動がきつと表面に出る。そうなれば、我々は生きていられないだろう。」

幼い子だけが北朝鮮で生き残ってどうなる」というのが父の考えだった。まさかそのまま学校に伝えたのではなかっただろうが、集団疎開に参加の弟は自宅に残ることに決まっていた。今日、八月十五日が学童疎開の出発日である。遊び友達がいなくなったあとの弟のことが心配だった。母の影響かもしれないが、母は子供のことは学校に任せたいと考える人だったから、弟の教育を不安がっていた。

しかし、四、五日前にソ連が参戦して満州に侵入したため、疎開先との連絡が絶えて、出発は延期された。もし、予定通り出発していたら、先生も子供たちも疎開先に落ち着くこともできず悲惨なことになっただろう。疎開に反対した父にしても、北朝鮮が最も危険な地域になるとまでは考えていなかったらしい。その証拠に我が家でも日常生活には不要だが、大事な晴着などは北朝鮮に疎開させていた。

屋根を支え合うように民家がぎっしり立ち並ぶ。父はそのころ、たびたび外蒙古に出張していた。東京が危険になったので、軍の中核である大本営を移す安全な場所を探している、という話だった。大学では医学部、理工学部の学者に文化人類学者まで加えた調査隊を編成し、外蒙古の気候風土から人情まで、移住の適否を調査していた。

だれの発案だったか知らないが、北朝鮮への学童疎開といい、外蒙古に大本営を移すことといい、本気でそんなことを考えていたのかと今では思うが、当時、北は絶対安全な地帯とされていたのだろう。ところが八月八日、日ソ中立条約を破棄したソ連軍が、突然満州に侵入して事態は一変した。

大学調査隊の拠点は外蒙古の張家口に置かれていたが、危険になったという連絡のあとは音信が途絶えた。父の安否が気がかりな私には、日本が負けたといううわさは考えるのも気が重かったの

路地を、私は学校へと足を速めていた。ふと気がつく、辺りの様子がどことなく普段と違う感じがした。電柱や家の壁のあちこちにビラが何枚も貼られていて、どのビラにも「本日正午重大放送」とハングルまじりで書きなぐってあり、漢字の部分には赤丸がついていた。これまでも独立運動への呼びかけと見られるビラはたびたび貼られていたが、警察がすぐ剥がしていたので、こんな風に数え切れないほどのビラを見たのは初めてだった。いやな予感がした。

「お早う！」を言い合いながら教室に入ると、仲良しのTさんが机に突っ伏して泣いていた。だが家が家で聞いてきて、「日本が降伏する」と伝えたのが騒ぎの発端で、「嘘よ、デマに決まってるわ。そんなこと言うだけで非国民だわよ。」と叫んで泣き出したという。他にもその話を聞いていた人がいて、真偽の確かめようもなく当惑した顔を見合わせているところだった。私は、父が長期出張でいなかったので何の情報もなく、話の輪から抜け

で、自分の席で黙々と作業に取り掛かった。だれもが同じような気持ちだったのか、教室内は異様に静かだった。

屋近く、スピーカーから「正午の重大放送を聞くように」と指示が流れた。登校時に見たおびただしいビラと同じ言葉が先生から伝えられたことで、私は緊張した。

しかし、正午の時報とともに始まった放送は、雑音ばかりで何も聞き取れなかった。クラス当番が、次の指示を聞きに職員室に行ったり戻ったり戻って来なかった。教室は昼下がりののんびりした空気に包まれていたが、当番がわめきながら飛び込んできた。「日本は負けたよ。無条件降伏すると天皇陛下が放送で仰ったんだ。デマじゃない。先生が放送局に行つて確かめてきたんだよ！」日本放送協会の京城支局は、校門近くにあった。真実と思うしかなかった。朝からの不安が形になって現れた。あるはずのないことが現実になった。だからともなく泣き出して、教室中声をあげて泣い

ていた。突然、空襲警報のサイレンが鳴り出した。戦争が終わったのになぜ、と呟きながら日ごろの訓練通りに、しかし、やる気の失せた動作で私たちはのろのと地下室に避難した。

そこで、担任から正午の放送について説明があった。「無条件降伏は天皇陛下ご自身のご意思であり、今後日本の領土は本州、北海道、四国、九州に限られる。その他の地にいる日本人は兵隊も民間人も、すべて武器や財産を捨て日本に帰らなければならぬ。我々のいる京城も、今日限り日本の国土ではなくなったのだ」とガダルカナル島の激戦地から負傷して帰還した担任は口早に説明した後、「故国に帰り、日本再建のため頑張ろう」と話を結んだ。いつもの「聖戦完遂まで頑張ろう」と言われたのと同様の、元気に溢れた口調が私には不思議だった。敗戦は、植民地にいる自分たちの生活を根本から変える。先生の話からそのことを知った女学生たちは、敗戦の悲しみから一転して激しい不安に突き落とされた。「家も財産も一

以来六十年が経つが、この日に別れたきりの友人は多い。そして明治四十一年、日本の朝鮮統治の初期から女子中等教育を担った京城第一高女は、その長い歴史を閉じた。

八月十五日の午後、京城の街から音が絶えた。真夏の太陽が照りつける下で、街は死んだように白く乾いていた。いつも雑踏する朝鮮街の鐘路通りにも、人影はなかった。たった一台、乗客のない無人電車が私たちを追い抜いて走り去ったことを、今でも覚えている。

友達と別れて独りになってからは、走り続けて家にたどりついた。門のわきの潜り戸をたたくと、母が待ち構えていてすぐ開けてくれた。意外にも、母は空色のワンピースに着替えていて、口紅をひき「戦争は終わったのよ」と幸せそうに微笑んだ。母は美しく、私の緊張は解けた。

その夜、久しぶりに明るく電灯のついた茶の間で母と弟と三人で、行方の知れない父を待たずに日本に引き揚げようと決めた。焼け野原の東京の

切捨てて日本に引き揚げろだなんて。日本のどこに帰ればいいの」と泣き出す人もいた。級友には朝鮮で生まれ育ち、この地を故郷とする人も多くいた。私にしたところで東京の家は引き払ってきただ。どこに帰れるのか聞かれても、返事の仕様がなかった。

まもなく空襲警報は解除されたが、米軍機は敗戦後の京城の様子を偵察しただけのようだった。全校生徒は急いで帰宅するよう言われた。明日は北朝鮮からの避難民を校舎に受け入れるので、手伝いに登校するようにも言われたが、それよりもまずは無事に帰宅できるかどうか問題だった。

校門には校長先生を始め先生方全員が並び、生徒一人一人の手をとって「気をつけて行け、かたまって帰れよ、生きて日本でまた会おう」などと、口々に声をかけて励ましてくれた。私は同じ方向に帰る数人の友達と連れ立ち、周囲に気を配りながら小走りに急いだ。

親戚よりは、長崎の田舎の祖父を頼りにして、そこで父を待つことにした。日本に帰る先があつて本当によかつたと思ひながら、私は眠りについた。長崎が原爆によつて焼き尽くされたなど、私たちは知る由もなかった。

翌八月十六日の朝、母に起こされた。母は黒いもんぺ姿になっていた。「ゆうべ色々と考えたけど、こんなときお金が一番頼りなの。銀行に行つてくるから、あとお願いね」。銀行は中心街にあり、歩いて一時間はかかった。母は、せかせかとたんの引き出しを開け閉めして通帳や判子を出すと、おなかに巻きつけて出て行った。私は、避難民のお世話に登校しなければ、と言ひ出す時間もなかった。あとで聞いたが、十六日に登校した生徒は少なかったそうである。

母は昼前、汗まみれの顔を上気させて戻ってきた。銀行で「閉鎖される前に全部下ろしなさい」と耳打ちしてくれたと言つて、分厚い札束をいくつも帯の間から取り出した。その日の午後には、

京城のすべての金融機関は閉鎖され、預金は凍結されたが、母はその間隙を素早く通り抜けた。

母のこの日の行動は専業主婦のものとは思われないが、女学生時代に実家の倒産を経験していた。造り酒屋の実家は、銀行の倒産に巻き込まれて破産した。出遅れた祖父は、預金のすべてをふいにしたとのことだった。

母の奮闘のお陰で、引き揚げのお金は用意できた。午後は、持ち慣れない大金を隠すのに親子三人、知恵をしばった。「宝探し」の逆の「宝隠し」は変に楽しくて、私たちは興奮して畳の下や押入の破れ目にまでお札を忍ばせた。そんな宝隠しは現実の不安を一時忘れさせたが、それも夕方までだった。

涼風がたち始め、闇が濃くなったところから戸外が騒がしくなった。「マンセイ！ マンセイ！」と叫びながら人々が走り回っていて、その足音がだんだんと激しくなってきた。人波はどんどんふくらんでいく様子で、叫喚は絶え間なく我が家を包

人ほとんどが朝鮮語を使えないから、日常生活は激変した。たとえば、電話は交換台の時代であり、話を通じなくてつながらない。新聞も読めない。口から口に伝えられるだけが、知りうるニュースだった。住んでいた大学官舎では集団で引き揚げることになったが、口伝えの伝令はまちまちで、明日だったり午後になったり、そのたびに大騒ぎになった。

日にちが思い出せないが、ある日の朝早く門が乱暴にたたかれた。飛び起きて抱き合いながら玄関に出ると、門の向こうに懐かしい父の声がした。そこにはリュックサックを担いだ父がいた。父は敗走する日本軍とともに蒙古、満州、北朝鮮を軍用列車を乗り継いで戻ってきた。父の話によると、「学術調査隊の拠点だった張家口は、奥地から避難してきた日本人でごった返していた。男は召集されて、老人と女、子供ばかりだった。自分たちを見捨てないでくれと取りすがられたが、迷った挙句に、最後の列車になるかもしれない汽車に飛

むようになった。小石がひっきりなしに投げられ、屋根は雹ひょうが降るように硬い音を立て続けていた。群衆がいつなだれこんでくるか分からない。喚声が高まるたびに、母と抱き合い覚悟した。

それは、半世紀にわたる日本の植民地支配から解放された朝鮮の人々の歓喜の叫びだった、と納得するのはずっとあとのことである。真夏なのに窓を閉め、電灯も消した暗い部屋の中で私は震えていた。暑かった覚えはない。オンドルの床の冷たさが今でも記憶に残っている。明け方になって、少しずつ騒ぎは収まっていった。そして突然、うそのように静寂がきた。私たちは疲れ果てて寝てしまった。

韓国、北朝鮮にとつて八月十五日は独立記念日である。十五日は突然の解放に呆然としていた人々も、十六日には活発に独立の歩を進め、放送局、新聞社、電話局など情報機関は朝鮮臨時政府が占拠した。言葉は朝鮮語に切り替わった。日本語を強制し朝鮮語を無視した政策のせいで、日本

「び乗った」と語った。弱い人たちの手を払いのけ、自分の妻子のために京城に帰ってきた父。父の帰宅を大喜びする私たちの中で、父だけは「俺は卑怯者だ」と暗い顔をしていた。

九月初旬、京城に米軍が進駐してきたが、その直前には、武装解除された日本軍は京城から撤退した。背囊だけ背負った兵隊さんたちが、大学前の大通りを長い列を作って通り過ぎた。歩調もそろえず列を乱した軍隊が延々と続くのを、道の両側を埋め尽くした朝鮮の人々が無言で見っていた。私も、人々に混じってひっそりと見送っていた。軍隊まで去ってしまうと思うと、言いようもなく心細かった。私が日本人と分かったのか、「生きて帰れよ」と怒鳴りながら通り過ぎる兵隊さんもいた。私は周囲に気兼ねしながらも、小さく手を振って応えた。そんなやりとりを、朝鮮の人々は無表情で見っていた。

米軍が進駐してきた日に、我が家は厳戒態勢に入った。沖縄の戦場から転じてきた荒れた部隊だ

から、何をされるか分からないと囁かれたし、あるうことか一部の部隊は大学キャンパスに駐屯したからだ。母と私は押入に身を潜め、外から見られないように、トイレにも廊下をはって行くほど用心した。隣家と相談して、境の塀に穴をあけた。どちらの家が襲われても、その穴を抜けて一緒に逃げる手はずを決めた。

しかし、心配したほどのことはなかった。ラジオで米軍放送が聞けるようになり、放送は絶えず兵隊に軍規を守るよう呼びかけていた。占領下の日本の様子も、米軍ニュースにより初めて知った。もちろん、英語のできる父に教えられてである。

戸外に出てみた父は、街の角々にMPが立っていて、これまでより安全だと言った。久しぶりに街へ出てみると季節は秋になっていて、京城の街は背の高い米兵が楽しげに歩く町に一変していた。彼らは鬼ではなく、青い目をした普通の青年たちだった。父を仲立ちにして、米兵と物々交換が始まった。派手な私の着物が何個かの携帯口糧に化

五 日本へ向かう

京城の街に、日本人の姿がほとんど見られなくなった十一月半ばに、ようやく引揚げの順番が回ってきた。二日後の朝、京城駅に集合し、大学官舎の居住者はまとまって十一月十五日発の列車に乗る。覚悟していても、いざとなると荷物のまとめは大変だった。

父は山歩きに愛用していた頑丈なリュックサックを二個背負うが、一方は書物と計算機（旧式の手回し）が占め、片方に服や下着、靴を入れると手いっぱいだった。私は、帯芯で手作りした不恰好なリュックサックに、厚い国語辞典と英和コンサイス、筆箱に下敷きをまず詰めた。制服や普段着を入れて、これだけあれば日本で学校に通えると考えた。弟も、迷いながら荷を造っていた。京城から先に引き揚げていった日本人は、持ち切れない荷物をあとで送るように頼み、残していた。東大門市場では、頼まれたはずの行李や旅行鞆が中身ごと路上で取引されていた。服や着物がはら

けた。一食分の口糧には、クラッカーに肉や魚の缶詰、チーズにデザートのココロレット、お湯に溶ける粉末コーヒーと砂糖、タバコまで二本入っていた。アメリカの豊かさを見せ付けられ、冷たいお握りで戦った日本の兵隊さんが哀れだった。

小学校の同級生の父親が刺されたのは、そのころのことだ。自宅に近い郵便局の路地裏で、遺体が発見された。特高警察の幹部だった人で、敗戦直前、家族だけ帰国させ、独り残務整理をしていたらしい。米軍の駐留で治安が回復したと知り、荷物を取りに帰宅したところを狙われたと聞いた。偶然私は事件の直後にその場を通りかかった。おびたらしい血の痕の残る路地には綱が張られ、無表情にMPが立ち番をしていた。

京城の街中からもだんだん日本人の姿が消えていった。だが九月が終わり十月が過ぎても、我が家には引揚げの順番は回ってこない。引揚げの日をじりじりと待ちながら、掃除もしない家で、家族四人、朝から麻雀をして怠惰に暮らしていた。

わたのように地面に引き出され、またたくまに何本かの手が伸びてからになった。そんな光景を目にしていたので、自分が運ぶだけがすべて、と覚悟を決めた。家具や布団などの家財道具は、同居していたハナサン一家が引き受けることになり、ハナサンはお返しに引き上げ道中の弁当を用意してくれた。

ハナサンは我が家が京城で暮らしを始めたころに、家事を手伝ってくれた女性で、夫が日本の学校に行っている間、日本語と日本の行儀を学びたいと言ってやって来た。彼女の朝鮮名は幼い弟には難しく、といって「オモニ」と呼ぶには痛々しい若さだったので、父が提案してハナサンになった。父は「花」を連想したらしいが、ハナサンも「ハナは朝鮮語で一のこと」と言い、乗り気だった。初対面の席で家中が「ハナ、ツッルー、セー、ネー」と朝鮮語の数え方を教わった。お手伝いさんというよりも、親戚のお姉さんの感じで我が家にはいた。その後、満州で夫と子育てしていたらし

いが、敗戦で夫の働く日本企業が潰れたため、山野を逃げ隠れして京城に帰ってきた。満州では、日本人以上に朝鮮人が迫害されたとハナサンは語ったが、彼女のやつれた様子から避難行の厳しさが窺えた。

ハナサン一家との同居で、門には父の表札の横にハナサンの夫の朝鮮名が並んだことで我が家の安全が保障され、少なくとも不意に襲われる不安は減っていた。残していく家財も、ハナサンたちの役に立つなら構わないと思った。我が家が引き揚げたあと、住む家が決まったハナサンも嬉しそうにしていた。

これが、引揚げが決まったときの我が家の状況である。

残していく荷物の中で、私はお雛様を捨てて行くのが切なかった。門に、「お雛様あげます」と張り紙を出した。次々に同じ年ごろの少女が来て、お雛様を抱えて帰った。大事にしてね、と言うのが私の精一杯だった。

れた小型の皮のトランクが持たされた。そして、まだ小学生だった弟の空いた手には、鍋釜と家族中の傘が束ねられて持たされた。

母の郷里に帰り着いてから、私は持ち帰った荷物を計ってみた。四十五キログラムあった。私は痩せていて体重は三十六キログラムしかなかった。母の体より重い荷を運んだことになる。母の和服への執着や強引さを、引揚げの間中、荷の重さに苦しんだ私は恨み続けた。「命だけ大切に」「身軽に」と言う父が正しいと思っていた。ところが、帰国した家族の生活を支えたのは、皮肉にも母の和服だった。公務員の父の給料は乏しく、農家は母の見事な和服が珍重されたからである。意外にも、母は苦勞して持ち帰った着物を、家族が生き延びるために惜しげもなく米や芋に換えた。ただし自分の先見の明を誇り、「お父さんの言う通りにしていたら、今ごろはうちは飢え死にだわ」と、父に嫌味を言うのは忘れなかった。

慌ただしい中で引揚げの準備は整い、前日から

慌ただしい準備の中で、問題は母だった。衣裳道楽の母は、うず高く積み上げた和服の山を覗んでいた。贅沢な和服ばかりで、勿体なくて置いて帰れないと言いつ張った。父は「焼け跡の日本でそんな着物を着て歩けるものか」と怒鳴り、母は「あなたには女の気持ちがあるから」と父を責めて泣いた。余力があれば一冊でも多くの専門書を持ち帰りたい父、薄情だと責める母。その結果、私の荷物に母の和服がぎっしり詰め込まれた。リュックリュックには、自分用の毛布もくくりつけられた。それで終わりではない。母は小型の柳行李にも和服を詰め込み、麻縄で手際よく締めて四個こしらえ、二個持つてねと私に頼んだ。背負うリュックリュックは一人では立ち上がれないほど重く、行李は持ち上げるのがやっと。片手に一個ずつ下げて歩けるとは思えなかった。しかし、あんただけが頼り、と母に言われるといやとは言えなかった。

弟のリュックリュックにも自分用の毛布がくくりつけられた上、アルバムから剥がされた写真を入京駅近くの待機するため手押し車に荷物を積み始めた。そのころから、門の外に人々が集まり始めた。何か起こりそうな不穏な気配がした。男も女も大勢集まっていたが、中に夜更けに風呂をもらいに来っていたテイサン一家もいた。大人も子供も、口々に私たちを指差して罵っていた。「気にするな、出発するぞ」と父が言い、荷車を曳き出そうとした。そのとき、わらわらと男たちが駆け寄って来て、荷車に取り付き「我々の国のものだ、みんな置いていけ」男たちは怒鳴って、父に車の柄を上げさせない。人数は増すばかりで、我れ勝ちに荷物を奪おうとした。遠巻きにしている子供たちは、小石を投げてきた。母も私も荷車にしがみついて、自分の体で荷物を守ろうと必死だったが、人々は容赦なく荷物から私たちを引き剥がそうとした。私の腕や肩を掴んだ瘦せた手の感触は不気味だった。既に荷車の上に登った男もいた。父は、男たちと殴り合いになっていた。

そのとき、門柱の上でだれかが叫びだした。ハ

ナサンの夫だった。朝鮮語で激しく説得している様子だった。しばらくすると、不承々々という感じで人々の手が荷物から離れ始めた。「さあ、今のうちに早く、あとは私が引き受けますから」と、こちらを向いたハナサンの夫が言った。

父は荷車を曳き出した。私たちがけて小石の礫はひっきりなしに投げられていたが、痛いというよりは情けなかった。荷物はすべて東京から持ってきた物で、朝鮮から奪ったものは何一つない。涙があとからあとからあふれた。「泣くんじゃない」と母が低い声で叱った。「泣きながら日本人が出て行った、などと言われたくない。堂々と歩きなさい」と言つて母は昂然と顔を上げ、礫を避けようともせず荷車を押しながら歩いていった。道の両側には葉の落ちたプラタナスの並木が寒々と続いていて、枯れ枝に点々と止まった白いかち鴉だけが私たちを見送っていた。

「石をもて追わるる如くふるさとを出でし悲しみ消ゆる時なし」石川啄木のこの歌を眼にするとも荷物の陰で用を足すことはできなかった。引揚者で満員の貨物列車は、ときどき駅でもないのに停車した。酒手を要求され、満足する額になるまで動かず、と思うと今度は突然、何の合図もなしに発車した。停車する都度、私は貨車を飛び降りて人影のない所まで走り、用を足した。母はいつも一緒に走ってくれた。簡単に用の足せる男性が羨ましく、女である身が呪わしかった。生理といえ、生理帯の中にお金を隠すと安全だと言われていた。引揚者が持ち帰ることのできるお金は一人千円と限られていたから、釜山での乗船前の身体検査で見つかれば没収された。生理帯まで調べられるようになり、日本人会の抗議で「隠さない、調べない」という協定が結ばれた。現実には自分の体に異変が起こつてみると、そこまで外させられて調べられる屈辱はよく分かった。

朝鮮に赴任するときには特急で半日の旅だったが、帰国は牛馬輸送の貨車で三日かかって釜山に着いた。荒れ果てた山寺に連れて行かれ、乗船の順番

びに、私はこの日の光景を思い出す。父は四十二歳、母は三十八歳、私は十五歳で第十歳の若い家族だった。

十一月十五日朝、京城大学工学部教員とその家族八十人ぐらいが、京城駅を出発した。乗り込んだのは牛馬を輸送する貨車である。高い所に小さな明かり取りの窓があるだけだった。戸を閉めると中は暗く、獣の臭いが染み付いていたが、屋根のある貨車でよかつたとみんなは言い合つて喜んだ。早速、両側の手綱を結ぶ鉄の輪に水筒を吊るしたりした。皆の大荷物はひとまとめに積み上げられ、その陰に用を足すバケツが置かれた。皆で知恵を出し合い、釜山までの長旅に備えた。バケツがあふれそうになると、リレー送りで小さな明かり窓から汚物を外へ投げた。この作業はなかなかうまくいかず、飛沫が戻つてきたりしたが、文句を言う人はいなかった。

私は、この旅にもうひとつの忘れ難いことがある。朝、初潮が始まった。いくら母に勧められてを待つ。釜山では大勢の引揚者が足止めされていた。寺の門前には、引揚者目当ての露天が賑わっていた。手持ちの食糧は尽きかけていたので、法外な値段だったがそれを求め、飢えずに出航を待つことができた。釜山はまだ暖かく、ゆつくり土の上を歩くのは快かった。

ひしめき合つて寺で二、三日暮らしたあと、乗船の番がきた。山のように荷物を背負い、手にも持てるだけ持った引揚者の長い列が波止場にできた。船まで頑張れば日本である。私は毛布をくくりつけたリュックサックを背負い、両手に母の和服の詰まった柳行李を引きずっていた。背中のは肩に食い込み、下ろすと立ち上がれなかった。列が止まる度に行李を立てて背の荷物を載せて、少し休むしかなかった。

夜が更けるにつれ、列は乱れてきた。まず、幼児や老人が歩けなくなった。といってだれにも助ける余力は無い。小さなリュックサックを背負わせられた幼児が、半ば眠りながらついてくる。母

親たちは眠らせまいとして子供の頬をたたき、励まし続けて声を漕らしていた。若い母親の中には胸に乳飲み子をくくりつけ、山のような荷物を背にも手にも持って、眠りながら歩く子を腰紐で引きずる人もいた。父親は戦場に行つて、まだ帰つて来ないのだろう。列の脇には、引揚者の捨てた荷物が増えだした。暗い釜山の埠頭を、難民の列は揺れながら動いていた。

私も荷物ごと後ろに倒れそうになるのをこらえながら、列の揺れるままに歩いたり止まったりしたり。すぐそばは暗い海で、岸壁に寄せる波音は絶えず私を誘っていた。「飛び込みたい」「もう楽になりたい」、そう思いながら棒になった足を運んでいた。

列は米兵が先導し、父が指令を伝えていたが、突然米兵が怒り出し、父は言い返していた。険悪なやり取りがしばらく続いていたが、やがて治まった。米兵は、女、子供にこんな荷物を持たせる日本の男を罵倒したのだという。父が、これは焼

汁とお握りが振舞われた。「おいくらですか」と財布を出した人は、彼らに笑われた。「ただだつてよ、ここは日本なんだ」その人は泣いていた。

船底に倒れ込むと、私は眠った。小さな海防艦は、玄界灘を渡るときかなり揺れたそうだが、私はひたすら眠っていた。「着いたぞ！」の声に飛び起きて、私は甲板に飛んでいった。霧の向うに緑の海岸が見えていた。「日本だ！ 日本だ！」と叫びながら、だれもが泣いた。

昭和二十年十一月二十二日の朝、山口県仙崎港に上陸し、引揚証明書と無料乗車券、一人千円を渡された。白い割烹着姿の婦人会の方たちが、早朝というのに炊き出しをして、暖かい弁当を持たせてくれた。日本に帰ることができて良かったと思つた。

六 帰国後の暮らし

家族は母の郷里、長崎市郊外の長与村に落ち着いた。そこは原爆の爆心地から約十五キロメートルくらい離れており被害は少なかったが、長崎駅

け野原の祖国に帰る我々の全財産だと答えると、彼は沈黙した。不意に私の手が楽になった。前を行く米兵が、母と私の手から行李をもぎ取って運んでくれていた。背の高い彼が持つと、重い行李は小さく見えた。母も私も「サンキュー！」と繰り返したが、彼は答えず不機嫌だった。この米兵のおかげで、母の和服は日本に着いたと言える。行李は捨てられる直前だった。明け方になり船が見えたとき、彼はやつと行李を下ろした。母は、急いで荷物の中から派手な友禅の風呂敷を取り出して、お礼に渡そうとした。彼は風呂敷を拡げると黙って見入っていたが、再びゆっくり畳んで母に返した。「大事な財産をもらうわけにはいかない」と言った。

乗船したのは日本海軍の海防艦だった。敗戦時には海外に軍、民間あわせて約二千万人の日本人がいたと言われる。短期間に引揚げをさせるため、動く船はすべて動員されていた。乗員の水兵たちは口々にねぎらいの言葉をかけてくれ、熱い味噌

に勤めていた母の甥は重症の被爆者だった。しかも村でただ二軒だけ、焼夷弾にやられて全焼した家の一軒で、兄たちが戦死、長兄はシベリアに抑留されていて未帰還、と戦争の傷跡の深い家だった。

母の実家は以前は造り酒屋だったが、破産して祖母が亡くなったあと、祖父は酒びたりの日々を送っていた。

女学校は長崎市まで汽車通学であり、村の駅まで歩いて一時間かかる不便な土地なので、父の勤務先が決まるまで、私は学校に通わず祖父の家で家事手伝いをした。父はすぐに上京し、アメリカ教育視察団の通訳をしながら職探しをした。

翌二十一年四月、父が仙台高専に赴任したので家族は仙台に移った。間借りではあり、布団は四大家族に二組しかなかったが、引揚げ後ようやく家族の生活が始まり、私は県立宮城第一高女に転入学した。八月の敗戦から半年経ち、学力が無いと決めつけられて私は三年に編入された。京城で

の成績は、問題にもされなかった。悔しかったが、仙台で三年生をやり直したお陰で、私は学力をつけることができて良かったとあとで痛感する。

一年半後、父が大阪大学工学部に赴任して再度の転居。私は、大阪城の向かいにあった府立大手前高女に転校した。仙台でも大阪でも、引揚者は授業料免除にしてくれた。制服もなく教材も揃えられなかったが、私は卑下もせず友達もできて楽しく通学した。しかし、住居は荒れた元工員宿舎の間暮らしで、まもなく私は結核になった。家族が寝起きする部屋の片隅で寝ている私を見た伯母が、「なぜ療養所に入れないのか」となじったとき、父は「療養所どころか、今死なれても葬式を出す金もない」と答えたのがつらかった。幸い半年で回復し登校すると、女学校は共学の高校になっていた。私は新制高校生として卒業し、奨学金とアルバイトで大阪大学を卒業した。仙台で一年留年しなければ、私は別の人生を歩んでいただろう。少なくとも、病気の体を労わりながら通学す

群。学生たちは目を輝かせ、急ぎ足に行き来していた。

昔の家の前で無邪気に騒ぐ子供たちを見ながら、私はこんな変化が何故生じたのか、やっと気がついた。昔、お手伝いのテイサンは子沢山で貧しく、夜更けに我が家の残り湯をもらいに来ていた。食糧や焚物も分けてあげて、私たちは「親切な日本人」のつもりだった。だが、食糧や残り湯をもらわなければ生きられない生活が楽しかったはずはない。

明治維新で苦しんだ祖父たち。敗戦を乗り越えた父母たち。私や弟は幸いにも何事もなかったように生き続け、子を育てることができた。

私は子供たちが中学生になったところから家庭裁判所の調停委員などをして、少し社会と関わって七十六歳の現在、まだ健康である。普通の暮らしは何物にも代えがたいと思う。

ることはできなかった。

その頃の私は、朝鮮の暮らしは思い出すのもいやだった。京城時代の友人とも交流を絶っていた。敗戦から三十四年経った昭和五十三年に、誘われて母と「ソウルツアー」に加わった。父はすでに世を去っていた。朝鮮戦争のあとで、韓国は復興の機運に燃え、ソウル市内はビルが立ち並ぶ近代都市に変貌していた。

ガイドの勧めで母と昔の官舎を訪ねたが、米軍の空爆にやられもせず、家は静かに時を重ねていた。塀越しに手入れされた庭木も見えて、住んでいる人の気配があった。なぜか涙が流れた。そのとき、うしろで子供の騒ぐ声があった。何故分かったのか、日本人だと言っている。子供たちは身奇麗で利口そうだった。昔、この辺りで遊んでいた子供は汚れきっていて、厳寒にもお尻を出して裸足でいたのを思うと、別の国のようにだった。私は、その日の朝訪れたソウル大学のキャンパスを思い出した。発展する韓国の象徴のような広大な建物

外地となった故郷

神奈川県 安田善吉

はじめに

朝鮮半島の北緯四十度に位置する日本海に面したところに咸興がある。咸鏡南道道庁の所在地で、朝鮮軍第七十四連隊を標高三百メートルの盤龍山麓に持つ軍都でもあった。また李王朝発祥の地で、川幅四百八十メートルの勇壮な姿を見せて悠々と流れ、日本海に注いでいる城川江が素晴らしい。この川には、北朝鮮一長い五百メートルにも達するコンクリート造りの立派な万歳橋が架けられている。

市内の大和町で、昭和六（一九三一）年五月に楽器販売業を営んでいた安田家の、六人兄弟の三男として産声をあげたのが、この手記を書いている私本人である。戦後の咸興で不自由のない生活と、引揚げで北から南へと歩いた状況が、多くの